――農業のやりがいはどのようなところにありますか。

農業は自分が「こうしたい」「こうやりたい」ということを自分で決めることができます。それができるのは自営業や農業で、自分で決めたことは自分で責任をもって行動できるというところが良いなと思っています。また、作る野菜や面積を増やすことで、収入も増えます。頑張った分だけ収入が増えるというのもやりがいや魅力の一つだと思います。そして、自分が頑張って作った野菜を食べてもらい「おいしい」と言ってもらえたら、それが一番うれしいです。自分が育てた野菜を消費者に喜んでもらえるのも農業の魅力であり、やりがいを感じられるところです。

――なぜ、白糠町で農業をやりたいと思ったのでしょうか。

元々祖母が農家で、子どもの頃からカボチャやナガイモ、アスパラなどの収穫を手伝っており、漠然とですが「農業って楽しい」と思っていました。私は帯広畜産大学を卒業後、十勝の農業協同組合に就職し、そこでの仕事にやりがいを感じてはいましたが、新たなことにチャレンジしてみたいという気持ちがあって、28歳のときに転職しました。サラリーマンになって農業施設の設計業務や現場代理人などを務めましたが、その会社は3年で辞めて、次はトマトの植物工場で栽培責任者を務めました。これまでも農業に関わる仕事をしてきて「農業って楽しそうだな」「自分でもやってみたいな」という思いがありました。それで札幌で開催していた「農業フェスタ」というイベントに行ったのですが、そこに白糠町のブースがあり、役場の担当者といろいろなお話をさせてもらいました。白糠町の気候のことは知っていましたし、就農者への支援も手厚いということが分かり、さらには実際に白糠町へ来て3年間の農業研修を受けながら、将来、農業ができるのかを判断することができるということを聞きました。それで、白糠へ来てやってみたら、きちんと野菜が作れることが分かりました。そういうことがあって、今こうして白糠町で農家をやれています。

――白糠町からはどのような支援を受けましたか。

トラクターやフォークリフト、あとはトラクターの後ろに付ける農機具ロータリーやマルチャーなどを購入したのですが、それらに町から半額の助成をいただいています。白糠町の支援は本当にありがたいと思っています。

――全国的に農業の後継者不足が問題となっています。

白糠町は今、7000人ほどの人口ですが、これが2040年、2050年になるともっと減っていくということが分かっていて、そのような中で農地を維持していくというのは難しいことだと思いますが、今の時代は自分のように農業をしていなかった人でも農家になれますので、そういう姿を見せながら、やりがいや楽しさを伝えることで、農業が職業選択の一つになればいいなと思っています。

――今後の目標を聞かせください。

気候変動に対応した新たな取り組みとしてリンゴなどの果樹栽培をやっていきたいと思っています。今は町と一緒に実証試験をやっている状況です。また、「道の駅しらぬか恋問」が新しくなりますので、そこに出せそうな野菜、とうきびやブロッコリー、アスパラなど、6月から8月にかけて出荷できそうなものを新たに増やしたいなと思っています。

1．ナガイモの収穫は10月下旬から11月上旬。バックホーという重機を使ってナガイモの脇に穴を掘り、その後は掘った穴に入って埋まっているナガイモを手作業で収穫していきます。2．今シーズンは約6,300株を収穫しました。3．収穫したナガイモは、主に豊頃町にある会社に卸しています。他には道の駅しらぬか恋問やふるさと納税のお礼の品にもなっています。

気候変動に対応した新たなチャレンジ 上庶路で果樹栽培

矢部さんが暮らしている上庶路地域の夏場は、気温が35℃近くまで上がることもあり、ほぼ十勝と同じような気候です。そこで町が新たにチャレンジをしているのがリンゴ栽培です。矢部さんの協力により、一昨年の5月にリンゴの苗木10本を植えました。2年目となる2024年、まだ実は成っていませんが、木は順調に育っています。

「今年はリンゴが実るかも」と期待する矢部さん

上庶路に赤ちゃん、40歳年ぶり!?

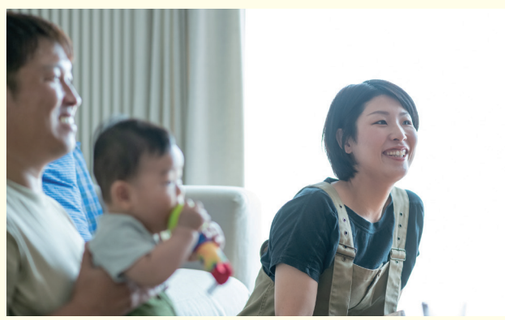
矢部さんは、妻のあゆ美さんと息子の公陽くんとの３人暮らし。自身の畑の横にマイホームを新築し、家族仲良く暮らしています。白糠町の子育て支援について、あゆ美さんにお話しをうかがいました。

――白糠町は子育てをするには良い町ですか。

はい。私は今、育児休暇をとっているのですが、子どもを保育園に預けています。姉とよく子育ての話をするのですが、姉が住んでいるところでは育児休暇中は保育園に子どもを預けることができないので、自宅で保育をしています。姉は白糠の子育て支援が充実していてうらやましいと言っています。

――市街地ではなく、ここに家を建てようと思ったのはどうしてですか。

私はここが好きなんです。「どんなところが」と聞かれたら答えられないんですけど(笑)。なんとなく「好きだな」って思うんですよね。夜は人がいないし、真っ暗なので怖いんですけど(笑)。近所の方から「上庶路で赤ちゃんが生まれたのは40年ぶりだ」って言われました(笑)

――ここでの暮らしに不便はないですか。

庶路のインターチェンジが近いですし、特に不便はないですね。私たち夫婦は実家が遠くて親に頼ることができませんが、保育園に子どもを預けられるし、医療費が18歳まで無料だとか、西庶路の公園にある「ふわふわドーム」で遊べるとか、本当に子育て支援はありがたいなと思っています。